

## 報告②

## イポリット・コントの蔵書印をめぐる

喜多見 洋

## 目次

## はじめに

1. ジュネーヴから見た蔵書印
2. デュモンの献呈本
3. イポリット・コントの蔵書印がもつ意味

## 結び

## はじめに

まずこのような形で報告の機会を与えていただいたことに感謝したい<sup>[1]</sup>。今日は、イポリット・コント<sup>[2]</sup>の蔵書印を手がかりにしながら、ジャン＝バティスト・セー<sup>[3]</sup>の蔵書と彼の経済学を含む知的活動について検討するつもりであるが、その前に少し申し添えておきたいことがある。

---

\* 本研究は JSPS 科研費 JP26380263 の助成を受けたものである。

<sup>[1]</sup> これは単なる形式的な謝辞ではない。私は、今から半世紀近く前、高校生の頃に神奈川大学の近くに住んでいた。六角橋まで来ていた市電が廃止され、白楽の駅のそばにまだ白鳥座という映画館があり、よい洋画を上映していた頃である。古本屋も大学の近くに沢山あった。当時の私は、現在の大学の20号館からグラウンドへかけての道で、近くに住む友人とこの大学の金網によりかかって夜中までよく語り合っていた。話の内容はとりとめのないものだったと思うが、これが海外に目を向けるきっかけになったことは確かである。神奈川大学が、50年近く前にこうした有意義な機会（特に夜中の照明はありがたかった）を提供してくれたことに対する感謝を込めての謝辞である。

<sup>[2]</sup> Hippolyte Comte, 1821-1880.

<sup>[3]</sup> Jean-Baptiste Say, 1767-1832.

それは山口茂教授の J.-B. セー研究についてである。今回のセミナーのテーマは「山口茂、山口文庫、J.-B. Say一生き続ける知の遺産一」となっている。だが、それにもかかわらず今日の私の報告には山口茂教授の名はあまり出てこない。そのためこの報告は、山口教授とは直接関係ないように見えるかもしれない。けれどもそれは誤解である。今さら言うまでもないかもしれないが、日本のセー研究のなかで山口教授の占めている位置はかなり大きかった。今日取りあげられている山口文庫はもちろんであるが、山口教授が戦後まもなく出版された『セイ『経済学』』<sup>[4]</sup> も見過ごすことはできない。この著作は、戦後かなりの期間、日本のセー研究のなかでスタンダードな文献であり続けた。私は以前にセーの研究史を論じた時、『セイ『経済学』』について「山口のこの本は若干古いが、現在までセーの経済学について日本語で書かれた唯一の単行本である。この著作は「セーをつうじて当時のフランスの考え方ないしフランス経済学の特徴をつかむ」<sup>[5]</sup> という大正末からの氏のセー研究の集約となっており、日本語でセーの経済学について学ぼうという場合に今日でも有益である」<sup>[6]</sup> と書いた。私のこの評価は、現在でも基本的に変っていない。山口教授本人は、『セイ『経済学』』の「はしがき」で自分の著作について「主著解題」<sup>[7]</sup> などと謙遜した表現をされているが、教授がこの著作のなかで行なっている次の指摘は現在でもその価値を失っていない。

「セイの経済学に対する批判は多くスミスとの関連において、独創性があるとかないとかの点にのみ触れているにすぎないものが多い。しかし私は三浦先生から与えられた問題〔＝「セーをつうじて当時のフランスの考え方ないしフランス経済学の特徴をつかむ」という課題〕から見るのが彼の経済学説史上における意味を最もはっきりさせることではないかと思う。」<sup>[8]</sup>

もうおわかりと思うが、山口教授のセー研究は、単にセーの思想体系全体

---

[4] 山口茂『セイ『経済学』』、春秋社、1948年。

[5] 同上、p.1.

[6] 鈴木信雄編『経済思想4 経済学の古典的世界1』日本経済評論社、2005年、p.284.

[7] 山口、上掲書、p.2.

[8] 同上、p.2.

から彼の経済学説の部分だけを取り出して議論するたぐいの月並みな経済学史研究ではない。氏の研究には、バックグラウンドとしてもっと幅広く深い西欧社会全体に対する洞察と認識が隠されているのである。おおらかな、いかにも旧制の一橋大学（東京商科大学）の匂いのする本格的な研究であり、山口文庫もこうした山口教授の広く深い研究の産物の一つであるといってよいだろう。そこで、この点に留意しながらイポリット・コントの蔵書印について検討してみることにしよう。

## 1. ジュネーヴから見た蔵書印

第一報告ではポティエ教授にセーの蔵書について、コントの蔵書印の話を含めて全体を総括的に論じていただいたので、私は特に、私が所蔵している本を中心にイポリット・コントの蔵書印の意義についての少し細かい特殊な情報について論じることにする。私の報告は、この蔵書印についてのジュネーヴという都市からのいわば「定点観測」が中心になる。もっと具体的にはジュネーヴという町から、この蔵書印を通して何が見えるかということであり、この点について説明する。

主に取りあげる人物はセー、デュモン<sup>[9]</sup>、コントの三人で、このうちジュネーヴ人はデュモン一人であるが、報告の中心点はジュネーヴから見るとこの蔵書の別な側面が見えてくるということである。現代のジュネーヴの町には、国連ヨーロッパ本部や赤十字国際委員会、WTO、ILO等、多くの国際機関があり、外国人比率が40%近い個性的な町である。だが歴史的に見ても、この町は変わった町である。まずカトリックの大国フランスの国境沿いにあるプロテスタントの拠点ともいべき都市で、昔から「プロテスタントのローマ」などと表現されていた。しかもセーが生きた時代には、ジュネーヴはとりわけ複雑な変化をとげている。すなわちこの町は、中世の終わりの頃からフランス革命の頃まではずっと独立した小さな共和国だったが、18世紀の終わりにフランス革命の影響をうけてフランスに併合されてしまいフランスの一都市になる。けれどもナポレオンの帝国が崩壊して王政復古の時代になると、今度は再び独立を回復して、その後自らの意志でスイスに加わるというように目まぐるしく変化しているのである。

---

[9] Étienne Dumont, 1759-1829.

そしてこの変化は、ここで問題とするセーにも少なからず関わっている。というのはセー自身は、リヨン生まれで、19世紀前半のフランスの代表的経済学者とされているが、彼の家は、もともと宗教上の理由からジュネーヴに亡命したプロテスタント（ユグノー）の家系だったからである。セーの家は、代々ジュネーヴに住んでおり、父もジュネーヴで生まれ育っていた。そのため、セーの父はジュネーヴ市民であり、彼がフランス人になったのは大革命の直前である。親戚も父方、母方ともジュネーヴに多く、J.-B. セーについての資料もジュネーヴの図書館や文書館に数多く残されている<sup>[10]</sup>。そこでそれらも参考にしながらジュネーヴからの視点でこの蔵書印を検討してみたい。

## 2. デュモンの献呈本

今日、イポリット・コントの蔵書印を論じる際に私が主に用いるのは、J. ベンサム<sup>[11]</sup>の『議会戦術と政治的詭弁』<sup>[12]</sup>という本である。この本は、二分冊で構成されており、E. デュモンによる翻訳となっている。そして注目すべきことにどちらの分冊にも、今日問題になっているイポリット・コントの蔵書印が押されている。蔵書印が押されているのは、各分冊の前扉、本扉、77ページ、本文最後のページである。またこれらの蔵書印の枠内にある登録番号の記入欄は、二冊とも空欄になっている<sup>[13]</sup>。著者のベ

---

<sup>[10]</sup> 最も主要なものは、セーがE. デュモン、P. プレヴォ、J.-C.-L.S. シスモンディといった同時代の経済学者や知識人たちと交した書簡類であり、ジュネーヴ図書館 (la Bibliothèque de Genève, BGE) に保存されている。これらの一部については、筆者が下記の形で発表している。Cf. 拙稿“Trois lettres inédites de Jean-Baptiste Say à Pierre Prévost”, 『日仏経済学会 BULLETIN』第21号、1999年；“Quatre lettres de Jean-Baptiste Say adressées à Etienne Dumont”, 『大阪産業大学経済論集』第1巻、第2号、2000年；“Les lettres inédites de Jean-Baptiste Say adressées à Etienne Dumont, datées des années 1820”, 『大阪産業大学経済論集』、第1巻、第3号、2000年。

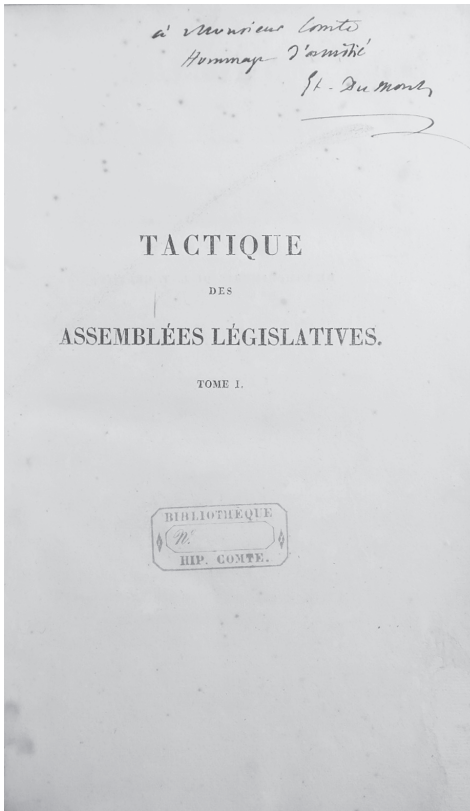
<sup>[11]</sup> Jeremy Bentham, 1748–1832.

<sup>[12]</sup> *Tactique des assemblées législatives, suivi d'un Traité des sophismes politiques*. Ouvrages extraits des manuscrits de J. Bentham par E. Dumont. Seconde édition, revue et augmentée. Paris, Bossange frères, 2 vols. 1822.

<sup>[13]</sup> 蔵書印枠内の登録番号の有無および各分冊77ページに押された蔵書印について確認できたのは、高橋則雄氏に指摘していただいたおかげである。

ンサムは、18世紀末から19世紀前半に活躍したイギリスの哲学者、法学者であり、彼が「最大多数の最大幸福」という表現で有名な功利主義を唱えて19世紀の西欧の思想に大きな影響を与えたことはよく知られている。この本の本扉に「J. ベンサムの原稿から E. デュモンによって抜粋 (extraits) された著作」と書かれていることからわかるように、ベンサムの場合、彼の著作をめぐる事情は少し特殊である。ベンサムの著作の多くは、ベンサムを高く評価していたジュネーヴ人の思想家デュモンがベンサムの原稿を編集、仏訳して、英語よりも先にフランス語で著作の形で出版され、まずそれによって高い評価を得ている。

さらにもう一つ注目すべきことに、この本の第一分冊の前扉には、第1図のように書かれている。



à Monsieur Comte  
Hommage d'amitié  
Et. Dumont

図 1

日本語になおせば、*amitié* の意味はうまく表現されていないが、「献呈コント様 エティエンヌ・デュモン」といったところだろうか。ともかく筆跡はエティエンヌ・デュモンのものでありこの書き込みによって、この本は編者であり訳者であり、この本の出版を企てたデュモンがコント氏に贈った本だということがわかる。ここまでが、このフランス語で出版された『議会戦術と政治的詭弁』自体が示している情報である。

私は、これにさらに私がこの本を手に入れた古書籍商に関連した情報を付け加えておきたい。私がこの本を入手したのは、2004年頃で A.Gerits & Son b.v. というオランダの古書籍商からである。その時の古書カタログの説明文には、「編者エティエンヌ・デュモンのイポリット・コントへの献呈の辞とデュモンの署名および前扉と本扉にイポリット・コントの赤い蔵書印あり」<sup>[14]</sup> と書かれていた。おそらく古書籍商は、前扉に *à Monsieur Comte* と書かれていて、イポリット・コントの蔵書印が押されていたのでそのように判断したものと思われる。こう考えると、この『議会戦術と政治的詭弁』は、デュモンがイポリット・コントに贈った本であり、一見したところセーとは関係ない本であるかのように見える。けれども、私は古書籍商の上の説明文を見て、この記述は正しくないと思った。というのは当時、私はすでに東日本国際大学の水田健教授と一緒に一橋大学社会科学古典資料センターが所蔵するマルサスの『経済学における諸定義』へのセーの書き込みを活字化して発表する仕事を終えた後であり、この本にもやはりイポリット・コントの蔵書印が押されていて、この蔵書印に注目していたからである<sup>[15]</sup>。この仕事をふまえて考えると、イポリット・コントの生没年(1821-1880)から見て、ここに書かれている *Monsieur Comte* とは、イポリット・コントではない。というのはこの著作の出版された年が1822年であるのに対し、イポリット・コントが生まれたのは1821年だからである。わずか1～2歳の子供にこの本を贈るのはどう考えても不自然である。従って、デュモンがこの本を贈った *Monsieur Comte*

<sup>[14]</sup> With a dedication of the editor, Etienne Dumont, to Hip. Comte and signed by Dumont, and with the red library stamp of Hip. Comte on half-title and title.

<sup>[15]</sup> Hiroshi Kitami and Ken Mizuta, "Les notes de J.-B. Say sur l'édition originale de 'Definitions in Political Economy' de T. R. Malthus", 『一橋大学社会科学古典資料センター年報』、第22号、2002年。当時(2002年)は、イポリット・コントの蔵書印の押された本がこれだけ日本にあるということは確認できなかった。

は、イポリット・コントの父親であるシャルル・コント<sup>[16]</sup>と考えるのが妥当であろう。

### 3. イポリット・コントの蔵書印がもつ意味

このシャルル・コントという人物は、19世紀フランスの自由主義の立場に立つ法律家、ジャーナリスト、思想家で、学者でもある。しかも、今回のテーマとの関連で注目すべきは、彼の妻がセーの長女のアドリエヌだということである。イポリット・コントの蔵書には、彼の父親であるシャルル・コントの蔵書も含まれていておかしくない、というよりもイポリット・コントの蔵書印を押された本には、セーの旧蔵書だけではなくて、シャルル・コントの旧蔵書も含まれていると考えた方が自然だということである。そして、そうした本の具体例がデュモンの贈ったこの『議会戦術と政治的詭弁』なのである。おそらく世界中には、この本の他にも何冊かはシャルル・コントの旧蔵書でイポリット・コントの蔵書印を押された本が残されているはずである。これがまず第一に、この本の蔵書印とデュモンの献呈署名が明らかにすることである。

けれども、この蔵書印とデュモンの献呈署名は、さらに多くのことを教えてくれる。いったいなぜデュモンはシャルル・コントにこの本を贈ったのだろうか。ここにシャルル・コントの義父であるジャン＝バティスト・セーが関係してくる。実は、セーとデュモンは、フランス革命の初期の頃から親しい関係にあり、デュモンがシャルル・コントにこの本を贈った際にはこの関係が影響しているのである。デュモンという人は、日本では主にベンサム功利主義思想のヨーロッパ大陸での普及者として知られている。しかし彼は、もう一つの顔も持っている。それはフランス革命の「語り部」という顔である。上に述べたように彼はジュネーヴ人なのだが、この町で1782年に町の古い体制の改革をめざして起こったいわゆる「ジュネーヴの革命」を公然と支持したことからこの町に居にくくなり町を出てしまう。そしてロシア、イギリス等を経由して結局、フランス革命のはじめの頃には、パリでミラボー<sup>[17]</sup>の側近として働くことになる。彼はこの時に、革命初期の多くの重要人物と接しており、その当時の詳しい具体的

---

<sup>[16]</sup> Charles Comte, 1782-1837.

<sup>[17]</sup> Gabriel-Honoré Riquetti, (comte de) Mirabeau, 1749-91.



な記録が『ミラボアの思い出』<sup>[18]</sup>という形で、1832年に出版されているのである。この本は、現在でもフランス革命に関する第1級の資料と評価されており、彼が「フランス革命の語り部」として評価される理由の一つとなっているが、同じ時期に、セーもジュネーヴ人脈を利用して同じミラボアの事務所で「ひよっこ」の受付係として働いていたのである。その後、結果的に二人とも19世紀まで生き残り、セーはフランスで、デュモンはスイス加盟後のジュネーヴでそれぞれ出世することになるのだが、フランス革命の時の縁で、王政復古の時代になっても、二人はずっと仲が良かったというわけである。革命が始まった頃、デュモンは30~31歳、セーは22~23歳くらいであり、俗な表現をすれば、デュモンはセーの兄貴分のような存在だったといつてよいだろう。

シャルル・コントとデュモンが親しくなるのはこうした関係にもとづいている。セーとデュモンが上述のような経緯で親密な関係にあったところに、1820年にシャルル・コントがフランスの王政復古政府にいらまれて、亡命を余儀なくされたのである。しかも、彼らの亡命先は、妻アドリエヌの家系のゆかりの地であるジュネーヴであった。だからデュモンとシャルル・コントが親しかったのは不思議なことではない。間もなくコントは近くの町ローザンヌへ行き、現在のローザンヌ大学の前身であるローザンヌのアカデミーで法律を講義するまでになる。だが1824年5月になるとフランス政府から抗議が来て、コントはスイスにいられなくなってしまふ。その結果彼はイギリスに行くのである。最終的にコントがイギリスからフランスに戻るのは1825年になる。この本がデュモンからコントに贈られたという事実の背景にはこうした交友関係が存在していたのである。従って、セーの名前が書き込みの文言に明示的に出てくるわけではないが、コントとデュモンの関係は、セーの家系とデュモンの親密な関係をもとに成立しているといつてよい。これが蔵書印とデュモンの献呈署名から知ることができる第二点目である。

そして三点目として、蔵書印とデュモンの献呈署名は、これまであまり注目されてこなかったセーの姿を明らかにするということが指摘できる。つまり、これまで経済学の世界では、セーと言えば「セー法則のセー」と

---

[18] E.Dumont, *Souvenirs sur Mirabeau, sur les deux premières Assemblées législatives*, Paris, 1832.



か「スミスの祖述者としてのセー」あるいは「19世紀前半のフランスの代表的経済学者としてのセー」が問題にされることが多く、日本ではこの傾向がさらに強かった。だが、この蔵書印と書き込みはそれとは異なったセーの姿、つまり、「フランス革命の生き残り」としてのセー、ジュネーヴとのつながりが深く、プロテスタントのネットワーク、ジュネーヴ人のネットワークをうまく利用している一人の知識人としてのセーの姿を浮かびあがらせるのである<sup>[19]</sup>。

さらに、この『議会戦術と政治的詭弁』の蔵書印とデュモンの献呈署名は、王政復古期以降のセーと功利主義のつながりの詳細を考える場合の資料の一つにもなっている。ローザンヌからイギリスへ行ったシャルル・コントとベンサムはかなり親しくなるが、これにはデュモンを介したセーとベンサムのつながりが関わっているのであり、この本は近年解き明かされつつあるセーとベンサムのけっして浅くない関係を間接的に裏づける資料でもあるということが出来る。

## 結び

デュモンがコントに贈った『議会戦術と政治的詭弁』に押されたイポリット・コントの蔵書印とデュモンの献呈署名から現在われわれが知ることができる点をまとめると、おおよそ以上になる。

今回の報告では、結果的にコントの蔵書印をとおして経済学者 J.-B. セーについて普通よく知られているのとは違った側面に光をあてることになった。セーという人物は、現代でも J.M. ケインズのおかげで「セー法則」のイメージで取り上げられることが多い。だが、山口教授が述べられているように、「彼の経済学は……政治、社会、道徳の基礎を示すべき任務をもっているのである。」<sup>[20]</sup>そして、今日用いた資料が明らかにするセーは、フランス革命の時代から王政復古を経て七月革命の後まで、ナポレオンの要請にも従わずに家族を守って必死に生き抜いた生身の人間であり、そういう人間が生み出したのがこの時代のフランス経済学だったのだとい

---

<sup>[19]</sup> 啓蒙思想およびフランス革命とセーの関係については下記の拙稿を参照されたい。  
Cf. 拙稿「初期 Say の経済思想—啓蒙、フランス革命との関連で—」、『関西大学経済論集』第67巻3号、2017年。

<sup>[20]</sup> 山口、上掲書、p.194.

う点を忘れないでいただきたい。それは、はじめに述べた山口教授の課題、すなわち「セーをつうじて当時のフランスの考え方ないしフランス経済学の特質をつかむ」ということにつながってくるはずであり、山口文庫の大切さを再認識することにもなるであろう。

〔追記〕

今回この報告原稿を作成するにあたって、シャルル・コントの蔵書印が押されエティエンヌ・デュモンの献呈署名が入った『議会戦術と政治的詭弁』をあらためて検討した。その結果、この本は、私のような個人が持っているよりもこの本に理解のある公的機関にだいに所蔵してもらった方がよいという結論にたっした。そして、公的機関のなかでもすでに山口文庫を有しており、このような形でセミナーを開催した神奈川大学は、この本を所蔵するのに最適の機関であると思われる。そこでセミナーの当日、この本の神奈川大学への寄贈を提案した。突然の提案にも関わらず、快諾していただいた神奈川大学の鳥越輝昭図書館長、出雲雅志教授、関係各部署に厚く御礼申し述べる。